

「青年海外協力隊 O.G.」

石井 陽子さん

ISHII Yoko

見つけたのは 自分の経験を最大限生かせる場所

「毛糸を編み込んでみたらどうかかな?」「ビーズも使ってみない?」
フィリピンの首都マニラから飛行機で1時間半、国内で10番目に大きいボホール島の工場で、熟練の職人さんがラフィアと呼ばれるヤシの木の繊維で生地を織っている。ボホール島では、特産のラフィアを使ったバッグなどが土産物として定番だ。しかし、「もっと魅力的な商品を作れないか。もっと観光客に買ってもらえるようになったら、それだけ収入の向上につながる」と

JICA Volunteer Story

PROFILE

1982年千葉県出身。美術大学在学中にイギリスのLondon College of Fashionに留学。2006年水着メーカーに就職し、「Betsey Johnson」の水着をデザイン。その後、バッグなどのデザインに携わる。09～2011年9月まで、デザイン隊員としてフィリピンで活動。

「デザイン」の力で 魅力的な商品開発をしてほしい」

青く美しい海を求めて多くの観光客が訪れるフィリピンのボホール島。ここで、青年海外協力隊の石井陽子さん、バッグなどのデザインを改善し、より「売れる」商品開発を支援。生産者のデザイン力の向上に貢献してきた。



「ボホール島の職人さんは、目をつぶってもラフィアを織れるプロでした」。彼らの技術と石井さんの新しいデザインが合わさって新商品が生まれた

る」。そんな生産者たちの思いがあった。そこで、2009年にボホール島にデザイン隊員として派遣されたのが石井陽子さん。「ラフィアの生地にビーズやキラキラした別の素材を組み合わせて使ったり、デザインをひと工夫したり、私がアイデアをちよつとプラスすることで、商品価値の向上を目指したのです」と話す。

物心がついたころから海外に興味があったという石井さん。国際協力に関心を抱いたのは高校生の時だった。ウガンダの小学校建設を支援する校内の活動に参加し、青年海外協力隊 O.B・O.G.とも接する機会があったのだ。いつか時機が来たら自分も協力隊に応募したい。そんな思いを胸に抱きつつ美術大学に進み、在学中にはイギリスに1年留学して靴やアクセサリーのデザインを学んだ。美大卒業後は水着のデザインを手がけたり、バッグのデザインに携わるなど、経験を重ねていった。

そして09年、転機が訪れた。協力隊のホームページを見ていたら、自分の経験が生かせる職種を見つけたのだ。それが、ボホール島での商品開発。「カードを切る時が来た」と思いましたね。そして同年9月、現地へ赴任することになった。

意志疎通に試行錯誤しながら デザイン力の向上を支援

石井さんが配属されたのは、貿易産業省の出先機関の開発部。ボホール島では観光業が大きな収入源のため、同機関は手工芸品などの土産物開発に力を入れてきた。この部署では地元企業を対象に、工芸加工技術などのワークショップや直売会の開催などを通して地域産業の発展に向けた支援を行っている。企業は登録されているだけでも30以上にも上るため、石井さんはその中から連絡のとりやすさや作業員の数などを考慮して6つの企業を選び、日々巡回して商品開発やデザ



a.石井さんが支援した生産者は、大勢の職人を抱える大規模な工場から母親たちのグループまで、大小さまざま
b.毛糸、ビーズ、キラキラ光るテープ、ストロー、そして新聞に至るまで、使えそうな素材はどんどんデザインに取り入れた
c.「ボホール島を訪れる観光客からかわいいと思ってもらえる商品を開発しなければ」。イラストを見せながら生産者にデザインを説明する石井さん
d.石井さんがデザインしたバッグ。このデザインをベースに、生産者自身にポーチなど商品のバリエーションを増やしてもらうことで彼らのデザイン力を強化した

インのアドバイスをを行った。「例えば、リボンがたくさん付いたラフィアのバッグを私がまずデザインし、それを生産者に渡します。生産者にはそのバッグを形にしてみたい、同時にリボンという同じデザインでポーチなどの違う商品をシリーズで開発してもらいました」と石井さんは振り返る。

商品開発支援のため、ボホール島に派遣された隊員は石井さんと3人目。先輩隊員たちによつて生産者の要望が調査されていたため、「その土台の上で活動できたのは恵まれていた」と石井さんは言う。

それでも、苦労はたくさんあった。当初、石井さんがバッグのデザイン案を生産者に渡しても、なかなかその通りには出来上がってこなかったのだ。「これまでのやり慣れた生産工程で作ったのか、指定の色の素材が売って切れていたのか、日本では考えられないような理由もありました」。そこで石井さんは、配属先の同僚の協力を得て現地語で生産者に石井さんが伝えたいデザインの補足説明をしてもらったり、細かい指示は生産者にメモを取ったり復唱してもらったり、サンプルを作って持っていくと、意思疎通を図る努力をした。その結果、少しずつではあるが、彼らの仕事に対する姿勢が変化。デザイン通りの商品も上がってくるようになった。「ここ直して、もっとこうして」とよく言いに行く私は、生産者にとって「姑」のような存在だったのではないのでしょうか」と石井さんは笑う。

活動の後半には、バッグやポーチなど開発した土産物を直売会に出品したり、商品開発のヒントを得るためマニラやセブ島からバイヤーを招待したりと、販路開拓の道すじもつけられるよう尽力した。

2年間の活動を終え、9月に帰国した石井さん。今後は協力隊での経験を生かし、観光地である地元の千葉県館山市で、房州うちわの生産など地域の産業に貢献していく予定だ。